

私は岩内町に生まれ、高校卒業まで岩内、泊村に育った。ふるさとということになる。そのことの有難さを実感するのは、ふるさとを離れて15年も経って、つまり北海道の風景をテーマにして絵を描きだしてからだった。道内各地を取材して歩きながら、何度も「この風景はどこかで見たことがあるな」という経験をした。それはまぎれもなく、ふるさとにつながる風景だった。

岩内、後志地方には北海道の風景のすべてがあると、言っても過言ではない。日本海、たくさん岬の岬に漁村。田園が広がり羊蹄山、ニセコ

連峰。そこに点在する湖沼。小樽の歴史。まさに風景の要素がぎっしりと詰まっている。そんな中に育ちながら、知らず知らずのうちに風景の見方というものを教わっていたのではないかと思う。感性というのとも知れないが、私の原風景であるふるさとがそれを育ててくれたのだと、いまさらながら感謝している。

ひとつの風景は、季節や天候によつて違った表情を見せてくれるものです。『小さな旅』と称して絵の題材を求め歩きまわるとき、どう見ていかに切り取るかということよりも、五感を使ってどう感

じるか、自分なりの小さな物語をそこに紡ぎだせるかが大事なんだという。表面からは見えない人々の暮らし、音やにおい、時間といったものが見えてくるか。こちらのアンテナの性能が問われているのだと。

私たちが前に生き続けようとするには、時に回帰がその原動力になってくれる。北海道遺産のひとつひとつは、まるでふるさとのようにそのことを教えてくれ、静かに力を与えてくれているはずだ。

私はその風景の中にある物語に、じつと誠実に耳を傾けていたい。



風景の中にある 物語に耳を傾けたい

藤倉 英幸／ふじくら ひでゆき イラストレーター、画家。
1948（昭和23）年岩内町で生まれ、泊村で育つ。岩内高校卒。74（昭和49）年から札幌でイラストレーターとして活躍。15年前からは絵に取り組む。作品は北海道の風景をテーマにしたものが多く、「後志は風景の箱庭。北海道の風景のすべてがある」と語る。作品集に「四季彩紀行HOKKAIDO」（北海道新聞社）、「はり絵で描く風景たち」（日貿出版社）など。JR車内誌の表紙イラストでおなじみ。札幌市在住。

